

第 16 回国際腹膜透析学会 (Congress of the International Society for Peritoneal Dialysis)参加報告

国際交流委員会 ISPD リエゾンナース委員 平松美紀

2016.2.27～3.1 オーストラリアのメルボルンで、第 16 回国際腹膜透析学会が開催されました。会場の Melbourne Convention And Exhibition Centre は、街を流れるヤラ川に面した南半球最大規模の建物で、隣接するエキシビジョンセンターでは連日様々なイベントが行われていました。通りには常に軽快な音楽が流れ、町全体がウェルカムな雰囲気を醸し出していました。

学会前日にはワークショップとウェルカムレセプションが開催され、初日は朝 8:00 から各セッションが始まりました。今回の学会で印象に残ったこと…それは、“Nurse Insertion of PD catheter”(ナースによる PD カテーテル挿入)でした。イギリスでは、2007 年には 1.2%の PD カテーテル挿入が看護師によって行われています。今回はイギリスでトレーニングを受けたブラジルの看護師の発表を聞きました。リエゾンナース委員でもあり、ブラジルでは大学の教授も務める彼女は、これまでに 5 例の PD カテーテル挿入術を経験しており、初めてのときは手が震えたと話していました。看護師が PD カテーテル留置術を実施することは、導入までの待機時間の問題を解決できること、留置術の前から導入後まで通して看護師が関わることで教育がスムーズであるなどのメリットがあります。前述のイギリスの調査では、多くの施設でカテーテル挿入までの待ち時間が 1 週間から 1 か月であったと報告されていました。カテーテル挿入を担う看護師には当然一定の条件があり、高度なトレーニングを受ける必要がありますが、大きなトラブルもなく、技術的にも医師の PD カテーテル挿入術と同等のレベルであると自信を見せています。「看護師の PD カテーテル留置術が定着するには、5~10 年はかかると思う。でも、どうしたらいいかわからないと言っているも前に進まないから。」「保存期から透析療法に至る過程で、看護師がカテーテル留置に関わるのは自然なこと。」と言っていました。PD 導入数の少ない日本では考えにくいことですが、カテーテル挿入も含めた一連のかかわりがブラジルでどのように功を奏するのか、これが他の国にも広がっていくのか、今後の経過を見守っていきたいと思います。母国語のポルトガル語の他、英語、スペイン語も堪能で、いつもバイタリティにあふれる彼女ですが、何より国を超えて実践を学び、患者中心の透析導入に向けて努力を続ける姿勢に改めて脱帽でした。



PD カテーテル挿入術のトレーニングを受ける Ana Figueiredo 氏 (ブラジル)
(本人の掲載許可あり)